新型コロナウィルス感染症

統括責任者　土屋　健弘

この度はデイセンターふらっとにてクラスターを発生させてしまったことに対しまして、まずはお詫び申し上げます。濃厚接触・陽性となった利用者・職員とそのご家族の皆様には、お詫びの気持ちでいっぱいです。

当法人は暮らしの場としてのサービスを展開し、多くの暮らしにくさを抱える方々へ支援の選択肢を増やすことに取り組み、平時の支えに関しては、まだまだ課題を抱えつつも一定の成果を上げてきたと感じていました。しかしながら、この間の新型コロナ感染症の蔓延という危機に対しては、まだまだ不足することが数多く存在していることを突き付けられた思いがしています。もちろん社会全体がまだまだ備え切れていない中でのことでもあり、当法人だけが不十分であったわけではないとは思います。とはいえ、不足を感じたことに目を逸らしていくわけにもいきません。

今回も陽性となった方にはグループホームにお住まいの方もいました。当然、同じフロアーで過ごしていただく選択肢はありませんでした。とはいえ、どこか社会の中で陽性となった方が過ごすことのできる場所もありませんでした。そのため継続して支援を届けるにしても、どこで過ごしてもらうのかという課題に直面しました。動線を分け、陽性となった方への支援には感染対策を徹底したうえで完全防備にてあたりましたが、それでも完全には対策を講じ切れていなかったため、支援にあたる職員を感染させてしまうことになったことは、私たちが不足するものの一つであったと感じています。

次に陽性となった方が発症する前に接触した利用者・職員に感染を拡大させてしまいました。マスクをすることが苦手な方もいる中で、感染を防ぐことは適わなかったかもしれません。しかしながら、平常時の感染対策にもっと取り組めることはなかったか？　と考えることは、振り返っていかねばならない事の一つであると思っています。

結果として利用者だけでなく支援にあたる職員にも感染が拡大し、平時よりも手厚く支援を必要とするにも関わらず、支援にあたることのできる職員が少なくなる状況が生じ、他の事業を担当する職員にも協力を得て乗り切ることになりました。しかし通常の支援を届けつつの協力となるため、限界ぎりぎりの無理を強いてしまわねばならなかったことに目をそむけるわけにもいきません。そのためグループホームや小松原の家にて暮らしておられる方の中には、ご自宅に一時帰省いただき、ご家族のご協力に甘えさせていただくことにもなりました。

このたびの経験から突き付けられたことは、平時の支援を余力をもって届けていける職員体制が取り切れていない中で、次に同様の危機が生じたときにも、その対応は極めて厳しいものになるということです。つまり現状は、精一杯の気持ちをもった職員集団ではありますが、それでも身の丈以上の責任ある事業を運営しているということなのだと思います。だからこそ、私たちは現在を何とか維持しつつも、新たな仲間を数多く迎え入れ、ご家族からのご協力に甘えなくても、あたりまえの日常を過ごして頂ける状況を目指さねばならないのだと実感しています。まだまだ至らないことを真摯に受け止めつつ、今後とも前進していきたいと考えていますので、引き続きご支援をいただければ嬉しく思います。

センター便り
絆
きずな

第189号

発行所
社会福祉法人
西陣会
HP:http://www.nishijin.org
E-Mail:nishijinkai@nishijin.org
〒602-8464
京都市上京区元誓願寺千本東入ル
TEL（075）451－8971
FAX（075）451－5700

発行者:南大路　文子
編集責任:土屋　健弘

郵便振替口座
01030-5-23086

ホームページでもご覧になれます

当法人への寄付金は、課税控除対象となりますので、その為の受領書が必要な方はお申し出下さい。

京都市障害のある中高生のタイムケア事業「うぃず」

「うぃず」の終わりに

副所長　小西秀和

これが、「うぃず」さいごの原稿になると思います。これまで出会ってくださったみなさんへの語りつくせぬ御礼と、多々あった至らぬことへのお詫びと、「うぃず」が果たしてきた役割や課題をきっちり述べるのが筋でしょう。しかし、さいごの私のわがままを聞いてください。「うぃず」の終わりにあたって、私自身の心の動きや考えてきたことを書かせていただきます。

十五年間。「うぃず」の始まりから終わりまで、私がかかわらせていただいた年月です。初めて担当した事業でもあり、寝ても覚めても「うぃず」と言っても過言ではありませんでした。そんな「うぃず」の終わりを意識した時、身を切られるような思いだったことを覚えています。

自分にとって大切な存在がなくなる時、自分自身の一部も失われたような気がすることがないでしょうか。「身を切られる」以外にも、「半身を失う」とか「心に穴があく」という表現もよく使われます。

実際に自分の存在が欠けてしまうわけではないのに、なぜそのように感じてしまうんだろう？　そんなことをぼんやり考えていた時、「分人」という考え方に出会いました。

「分人」とは何か？

小説家の平野啓一郎著『私とは何か―「個人」から「分人」へ』という新書があります。その人らしさや人格は、一人に一つ存在するものではなく、複数存在すると書かれていました。それって、一体どういうことなんでしょう？

小西秀和という個人を例えに「分人」を説明すると、次のようになります。

＊　＊　＊

仕事をしている時、家族といる時、友達といる時、小西はそれぞれ見せる顔が違うだろう。もっと厳密に言えば、出会った人それぞれにあわせて人格を使い分けて生きているんじゃないだろうか？

個人の英語はindividualであり、「分けられない」という意味である。だけど、家族といる時が本当の姿で、仕事している時がニセモノの小西であるわけではない。どの場面の小西も本当の小西である。だから、小西という人間は複数に「分けられる（dividual）」存在である。具体的に説明すると、小西の中には、うぃずでのAさんとの分人、Bさんとの分人、家族でも妻との分人、娘との分人、友達Cさんとの分人……、複数の分人が存在しており、その分人の集まりが小西である。

つまり、小西らしさは、いろんな対人関係ごとに見せる複数の顔（人格）の構成比率によって決定されている。分けられない個人（individual）ではなく、いくつもある「分人（dividual）」の総体が小西である。

＊　＊　＊

「個人」から「分人」へという人間理解に、とても共感するものがありました。

死の受容5段階

そうだったのか。私を構成している複数の分人の中でも、「うぃずとの分人」の比率がとても大きかったんだな。あのときの身を切られるような思いは、決して比喩なんかじゃなくて、自分の中の「うぃずとの分人」がいなくなるという喪失感だったんだと、思い至りました。

じゃあ、その喪失感を最小限にできないだろうか、自分の中でちゃんと準備してお別れの時を迎えることができないだろうかと考えました。そこで思い出したのが、キューブラー・ロス著『死ぬ瞬間』でした。著者が死に直面している200人以上の患者へのインタビューを通じて書かれた本です。

私の中にいる「うぃずとの分人」が死を迎えようとしていることを、客観的に捉えてみたい。そして、その悲しみや苦しみを少しでも和らげることができたらと思いました。

ロスはインタビューを通じて、死にゆく人々は次のような5段階を経験すると考えたそうです。

＊　＊　＊

第一段階―否認と孤立
「あり得ない」と、自らの死を否定する段階。

第二段階―怒り
「なぜ、私なんだ」と、怒りや恨みなどの感情を周囲に発散する段階。

第三段階―取り引き
「〇〇するから、お願い」と、信仰や善行によって死を遠ざけようとする段階。

第四段階―抑うつ
「神も仏もいない。もうダメだ」と、喪失感や虚無感に襲われる段階。

第五段階―受容
「死からは逃れられない」と、抵抗をやめて死を受け入れる段階。

※それぞれの段階は行きつ戻りつするものである。

＊　＊　＊

そのことを知っていると、今の自分は否認の状態かも

しれないなとか、怒っているなとか、抑うつ的な状態だなとか、少しだけ自分を俯瞰することができたように思います。そして、ちゃんと受容しないといけないという思いもあり、昨年開催した『ういずが閉所するから会いに来てネ展』は、生前葬のような思いで臨んでいました。

しかし、最後の「受容」だけは、いまだに実感が伴わないというのが正直なところです。

痛みの正体

少し経ってから、私は重大なことを間違っていたのではないかと思うようになりました。最後の受容がいつになっても訪れないのは、そもそも私の中の「ういずとの分人」が失われるわけではないからでした。つまり、消えるはずのないものが、消えてしまうと恐れていたのでした。

実体のある「リアルなういず」と、実体のない私の中にある「ういずとの分人」とがグチャグチャになって、混乱していたのでした。このやって整理できたときの安堵感は、計り知れないものがありました。

そもそも、あの時感じた身を切られるような痛みは、感じなくても済むものだったんじゃないか？　それにしても、単なる思い違いから痛みを感じるものなんだろうか？　そんなことを考えている時、「幻肢痛」のことを思い出しました。

例えば事故で腕を切断してしまった人が、ないはずの腕をあるように感じるだけではなく、その腕の痛みまで感じるというのが幻肢痛です。私が感じたあの痛みは、「ういずとの分人」がいるのにいないと感じた時に生じたものでした。幻肢痛はその逆で、ないのにあると感じる時に生じる痛みだとも言えます。

美学者の伊藤亜紗著『記憶する体』では、次のようなことが書かれています。

＊　＊　＊

これまでの研究で、幻肢痛が緩和されるためには、義肢、鏡像、イメージなど「これは自分の体の一部だ」と思えるような対象を獲得することが有効であることが知られています。幻肢痛は、「動くだろう」という予測に対して、「実際に動きました」という結果報告が返って来ないことが原因で生じると考えられています。

＊　＊　＊

私が興味深いと感じたのは、実際に腕がなくても腕が動くというイメージさえあれば痛みが緩和されるということでした。余談になりますが、VR（ヴァーチャル・リアリティー）を用いた幻肢痛の治療もあるとのことで、平野啓一郎の最新作では亡くなった母をVF（ヴァーチャル・フィギュア）で再現しようとする主人公が描かれています。

痛みの正体は、痛みの元がどこかにあるのではなく、自分自身の中で生じるギャップそのものなんだと理解しました。

「ういず」の終わりに

これまで迷走する私の心の動きを書き連ねてきましたが、まとめると次のようになります。

①「ういず」終了を知った時、あるはずの「リアルなういず」がなくなってしまうというギャップに私は苦痛を感じた。

②私の中に「ういずとの分人」がいるにもかかわらず、その分人を失うというギャップに苦しみ、分人の死を先取りして受容しようともがいた。

③しかし、そのギャップは存在しないことに気づき安堵した。「リアルなういず」はなくなるが「ういずとの分人」は私の中に居続けると悟った。

そして最後に、私は「ういずとの分人」と、どのようにつきあっていくのか？という問いが残されるだけとなりました。

「ういずとの分人」は、ういずが終わったときのまま変化しません。「リアルなういず」と私との間に生まれた分人だからです。一方、私は生きている以上、環境の変化や出会いや別れを通じて、私の中の分人比率は変わり続け、私らしさや個性も変化していきます。そして時の経過とともに、私の中の「ういずとの分人」比率は、少しずつ小さくなっていくでしょう。

これまでの私は、ギャップから逃れようと必死でした。しかし、変わらない分人と変わっていく私との間にギャップは存在しないと感じています。なぜなら、分人は私の一部であるからです。そして、これから生まれるであろう分人にも、「ういずとの分人」が含まれていくからです。私の中で小さくなっていくけれど、広がっていくイメージを掴むことができました。

それはきっと、「ういず」に限ったことではありません。始まりがあるものには、すべて終わりがあります。しかし、終わりは「無」ではなく、そこから続いていくものが「有る」ことを体験しました。また同時に、始まりには既に終わりが含まれていることも実感しました。

「ういず」の終わりに、終わらない「ういず」を想いながら、いつか終わるであろうあたらしい一歩を、踏み出していこうと思います。

地域生活支援ニュース

西陣会居宅サービス係

「目の前の関わる全ての人に」

主任　近藤　隆平

私は西陣会で働き始めて十九年目になります。ボランティア、登録ヘルパーと経て、職員になり今に至ります。ご利用者と過ごす毎日は今なお新鮮で十年以上関わりのある方でも、つい最近、こういうお声掛けや関わりをすれば不安やしんどさが和らいでリラックスしていただけるんだとわかったこともあります。

お一人お一人のことを考え続けて発見があったり、同じ支援者と相談する過程は楽しいと感じますし、関わるご利用者に楽しんでもらえたり笑顔で過ごしてもらえると嬉しく、自分はこの人たちのことが好きやなぁと実感します。

西陣会で今まで働いてきて思うのは、個々の職員みんながご利用者のことだけでなく職員のことも考えながら一人一人のやりたいことや些細な声でも拾ってくれたり、日々の業務で気遣って声をかけてくれたり、お互いが繋がっているなと感じることは多く、役職者であっても良い意味で線引きはありつつも友だちのような感覚で接して頂ける魅力ある人間の集まりだということ。

法人運営が身近に感じられ、何か変えたいことがあっても親身に話を聞いていただけることはとても大きなことだと思っています。人の力が足りずご利用者のご希望に応えることが難しいこともあります、働く中で頑張りすぎるということもあるかもしれません。私が西陣会で働く理由は良い法人だから、福祉の仕事だからといったものではなく関わるご利用者や一緒に働くみんなが好きで、これからも共に一緒の時間を過ごしていきたいと思っています。

デイセンターふらっと

コロナ禍で私たちができること

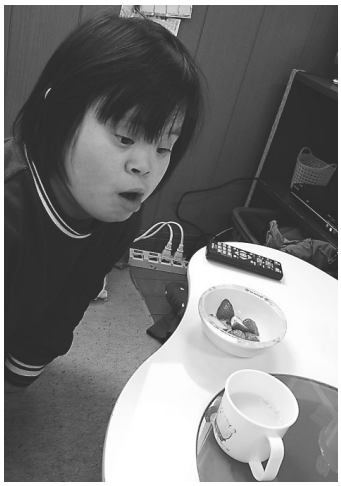
ユニットリーダー　田中　久美子

私は今年の一月末にコロナウイルスにかかってしまいました。その時はお薬を飲んでも熱が下がらず、発熱から四日目を迎えた頃から焼けるような喉の痛み、頭痛、吐き気、耳の痛み、咳の症状が出てきて、どう考えても悪化している感じでした。

助けを求めようと通院した病院に電話をすると「コロナウイルス陽性の方は病院に来てもらえない。保健所に電話をしてほしい」と言われ、保健所には「あなたは軽症のため、かかりつけ医に聞いてお薬をもらってほしい」と言われ、たらい回し状態でした。インターネットで調べ、以前もらった風邪薬を飲みながら、治していきましたが、頼る先もなく、孤独を感じ、いつ治るのか不安の中、しんどい日々を送りました。

同じようにご利用者やそのご家族がコロナウイルスになられた場合、同じ大変な思いをされるのではないかと感じたため、デイセンターふらっとして何ができるのか、みんなで話し合いをしました。

自分がコロナウイルスにかかったことで、同じしんどい思いをご利用者、そのご家族にはしてほしくないという思いも強く、今までも感染予防対策は行っていましたが、コロナウイルスをうつさない、うつらないようにするために



ハッピーバースデー!!

マスクでお参り

は、もっと強化していく必要があるのだと感じたため、感染予防のマニュアルを作成し、感染対策の徹底をするように心がけています。また、ご利用者にもマスクを着けていただき、マスクが使用できない方にはどのようにすれば、マスクができるのかなど考えていっています。

ご利用者やそのご家族がコロナウイルスに感染された場合、病院、保健所もひっ迫し、対応をしてもらえない可能性があります。その時には、私たちがお手伝いできることはさせていただきたいと思うため、ご家族のお話を聞きながら、その時に必要な手立ての手配できるようにしていきたいと思っています。

まだまだ不安な日々が続きますが、早く制限ない、落ち着いて過ごせる生活に戻ればいいなと思います。

支援センター「きらリンク」

引越しの支援

相談員　小野　紀代子

春は進学や就職、転勤で人の動きが増える季節です。障害のある人は、上記の理由だけでなくさまざまな事情をかかえ引越すことがあります。実家からの自立や家屋の老朽化、さらには長期に入所・入院していた場所を出て地域での生活を始めるなどです。

障害の有無にかかわらず、引越しは労力と神経を使う作業の連続です。利用者や家族のみでそれらに取り組むのが難しい場合、支援センターに応援要請の相談が入ることがあります。

「利用者とその環境に働きかけることで、その人が望む生活に少しでも近づいていけるようにする」という社会福祉の視点からも、引越しの支援は象徴的な場面と言えます。概ね以下二つの要素があると私は考えています。

①環境変化に伴う本人の物理的心理的負担を軽減する（例：段取りの確認、家財道具の整頓や購入など作業協力、体調確認など）

②権利擁護の観点から、対人交渉を円滑にして本人の目標達成を促す（例：希望条件の聞き取り、不動産会社や運送業者・行政機関等への同行や代弁・連絡調整、引越し後の社会資源の確保など）

「なるべく希望に合う物件で、自分らしく暮らしたい」という本人のお気持ちを大切にしたいと思っています。引越しは人生の一場面、一つの始まりにすぎませんが、新たな環境で良いスタートを切っていただけるようにとの思いで毎回取り組んでいます。

支援センター「にしじん」

実習生さんからの学び

相談員　万代　由香利

西陣会では毎年実習生さんを受け入れていますが、どの実習生さんも限られた期間の中で、少しでも多くのことを学ぼうと真摯に取り組んでおられる姿が印象的です。相談支援は常に目の前に利用者さんがおられるわけではないので、わかりにくい部分も多いと思うのですが、本当に一生懸命話を聞いてくださり、質問をしてくださいます。そんな実習生さんの姿に、こちらも少しでも多くのことをお伝えできればと思いながらお話をさせていただくのですが、学びの場を提供しているこちらも実習生さんの気づきや問いかけ、新しい視点に学ばせていただいていることに気づかされます。自分はなぜこの仕事を続けているのか、何を大切に思って支援しているのかなど、自分自身を振り返ることのできるとても大切な機会をいただいているように思います。

人と関わる仕事は何年経っても学び成長していかなければならないものだと思います。年齢に関係なく、経験年数に関係なく、いろいろな方からお話を聞き、視野を拡げることは大事です。

実習生さんから、なぜ？と問いかけられた時、自分たちにとっても学びのチャンスなので、一緒に学び、成長できるよう取り組みたいと思います。

4月には「にしじん」でも新しい職員をお迎えすることになりました。新しい職員からも学ぶことが多いと思いますので、共に学び、成長できるような関係を築いていけるようがんばりたいと思います。

路地裏ステーションニュース

西陣児童館

地域とともにあること

亀井菜央

西陣会に入職し一年が経ちました。社会人一年目でもあったこの年は瞬く間に過ぎていき、これまでの人生で最も時の流れを早く感じました。ドキドキしながら西陣会の門を叩いた日が昨日のことのように思い出されます。

私は田舎の漁村で生まれ育ちました。コミュニティは狭く、地域のみんなが親戚のような存在でした。インターホンを鳴らすことなく家にあがってきてお線香をあげるおばちゃん、下校途中の私に声をかけ「食うてけ！」と七輪で魚を焼いてくれる港のおいちゃん……そんな武骨ながらもあたたかな人々に育てられました。

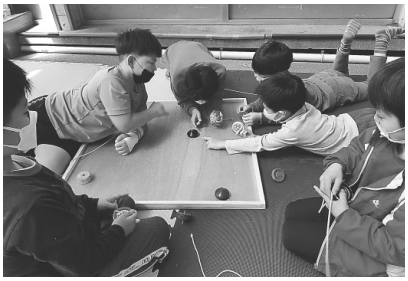
そして高校生の頃、家庭が原因で体調を崩していた私に手を差し伸べてくれたお二方との出会いが私のターニングポイントとなります。そのお二方は、スクールソーシャルワーカーと民生委員でした。家や学校、友達とはどこか違う安心、そして新たな居場所を作り出してくださりました。今思えば、そのお二方の専門性や知識、経験や技術などの緻密で繊細なかかわり、そして何より〝地域の人〟ならではのあたたかさがなし得た安心感だったのだろうと思います。

その経験から「私もこの人たちのようにどこかの誰かのためになれたら」「同じような思いを抱える家庭やこどものためになれたら」と考えるようになり、それがいつしか憧れに変わりました。しかしどうすればそうなれるのだろう……。考えが十分でなかった幼稚な私はただ安直に憧れた方と同じ資格を取得しました。そしてある日、西陣の地に根を下ろし、長い年月を地域と共に在ってきた西陣会と出会いました。ここしかない！と決め、今に至ります。

そして二年目。〝地域の人〟としても、西陣会の一員としてもまだまだ新参者で未熟な私ですが、西陣児童館が地域の中のほっとできる居場所、安心できる居場所としてあり続けるためのお手伝いができていることを、とても嬉しく思っています。私が安心できる居場所で自分らしく過ごせたことを思い出しながら、しみじみと……。地域の関わりが希薄になりつつある現代だからこそ、より一層ひとつひとつの出会いを大切にしながら、場所は違えどバトンを繋いで、私もいつかは「地域のあったかくて頼れるおばちゃん」になれるよう、研鑽していきます。

じどうかんギャラリー

花の精♡♡



コマにハマッてます!!

いざ出陣！
（おにごっこのオニたち）

ぽこあぽこ　桜の木の下で

世界にひとつだけの
私のし・お・り！

活動日誌

【本部業務・公益事業】

1月
12日 記念新聞取材
17日 産業医面談・安全衛生委員会
18日 虐待防止委員会
24日 キャリアパス&人材育成計画推進委員会

2月
1日 職員登用試験
10日 総務委員会
14日 キャリアパス&人材育成計画推進委員会
15日 記念新聞取材
21日 産業医面談・安全衛生委員会

3月
3日 ステップアップ研修フォローアップ座談会
5日 理事会
11日 記念新聞取材
14日 キャリアパス&人材育成計画推進委員会
19日 虐待防止委員会
26日 ステップアップ研修評議員会
28日 正規職員会議
産業医面談・安全衛生委員会

【西陣児童館】

1月
7日 学童クラブ向け「防犯教室」（上京警察協力）
16日 放課後児童支援員認定資格研修（松本）
20日 新型コロナウィルス感染拡大防止のため臨時休館（～27日まで）

2月
26日 学童クラブ新規利用保護者説明会（ZOOMと併用開催）

3月
1日 華頂大学実習生2名受け入れ（3月11日まで）
16日 乾隆小学校運営協議会（中山）
26日 出前児童館「みんなであそぼう」
29日 学童クラブ卒部生に贈る会

【居宅サービス係】

1月
9日 居宅職員全体会議
20日 居宅介護等事業連絡協議会
25日 サービス提供責任者会議

2月
3日 居宅介護等事業連絡協議会
13日 居宅職員全体会議
15日 居宅サービス係運営会議、サービス提供責任者会議

3月
13日 居宅職員全体会議
15日 サービス提供責任者会議
28日 となり・きたまちグループホーム支援者会議

【デイセンターふらっと】

1月
28日 新型コロナウイルス感染拡大防止のため休所（～2月4日まで）

2月
14日 同志社大学実習生3名受け入れ（3月2日まで）
21日 ご利用者の健康診断開始（～3月24日まで）

3月
3日・7日 京都府相談支援従事者主任研修
11日 基幹支援センター事業権利擁護連絡会
12日 京都府障害者ITサポート事業（パソコン補助具・意思伝達装置説明会　重度障害者意思伝達装置実践研修）
16日 左京こころのふれあいネットワークワーキング会議
17日 基幹センター会議
24日 京都市障害者地域自立支援協議会

【きらリンク】

1月
7日 北部自立支援協議会運営会議
15日 北部自立支援協議会支援センター部会
24日 京都府相談支援従事者主任研修
26日 相談支援事業者座談会（北部自立支援協議会・基幹支援センター共催）

2月
14日 北部自立支援協議会児童養護自立支援連絡会
21日・24日 京都府相談支援従事者主任研修
22日 北部自立支援協議会夜のZoom交流会

3月
3日・7日 京都府相談支援従事者主任研修
11日 基幹支援センター事業権利擁護連絡会
12日 京都府障害者ITサポート事業（パソコン補助具・意思伝達装置説明会　重度障害者意思伝達装置実践研修）
16日 左京こころのふれあいネットワークワーキング会議
17日 基幹センター会議
24日 京都市障害者地域自立支援協議会

【にしじん】

1月
6日 中部自立支援協議会事務局会議
13日 機能集約合議体
15日 鴻巣麻里香氏連続講座
17日 相談支援専門員現任研修講師派遣
20日 中部自立支援協議会運営会議

2月
3日 中部自立支援協議会事務局会議
12日 鴻巣麻里香氏連続講座
17日 相談支援専門員カフェ
22日 基幹支援センター会議

3月
4日 介護職員初任者研修講師派遣
15日 支援センター会議
16日 相談支援専門員スキルアップ研修
19日 鴻巣麻里香氏連続講座
23日 上京ネット実務者会議
24日 中部自立支援協議会

※毎月、施設長会議・主任会議を実施しています。
その他、諸事業諸活動においても定例活動を行っております。

センター往来

◎3月5日(土)理事会、3月19日(土)評議員会が開催されました。2021年度補正予算2022年度予算と事業計画について承認されました。

◎3月25日(金)タイムケア事業ういずの卒所式&閉所式が行われました。15年もの間、場所を提供していただいた紫野小学校の教頭先生、京都市子ども家庭支援課の森田氏、吉野氏にご臨席いただき、あたたかいお言葉をいただきました。

◎3月26日(土)正規職員会議をZoomにて行いました。

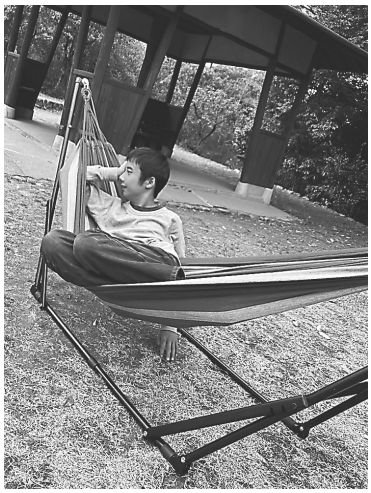
※お知らせ

4月に例年開催している「桜まつり」は新型コロナウイルス感染防止のため中止させていただきました。

京都市放課後等デイサービス支援事業、四年目の新たなスタート

2019年7月よりはじまった京都市放課後等デイサービス支援事業が四年目を迎えます。2022年度もプロポーザルによる選定を経て、3法人（(福)カトリック京都司教区カリタス会・(福)京都基督教福祉会・(福)西陣会）が受託を受けました。

当事業の目的は、市内指定放課後等デイサービス事業所及び市内指定児童発達支援事業所を対象に、児童の支援技術及び充実した個別支援計画の作成に資する研修、支援等について、助言・指導等を行うことにより、事業所における療育の質の向上を図るとされています。委託業務として、訪問事業、研修事業、情報提供、連絡会議の開催を行います。



船岡山で「気分はサイコー!!」

地域生活支援事業バックアップ会員報告

皆様から心温まる会費を頂き心より感謝申し上げます。

二〇二一年度報告

福井　治子　鬼塚　義正
小西　秀和

（順不同・敬称略）

計　七口(七千円)

累計　百十六万四千三十円
二〇二二年三月二十三日現在

郵便振替口座
(バックアップ会員専用振替口座)
加入者名
地域生活支援事業委員会
口座番号
〇〇九〇〇三―三三七一九

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

ゴールを決めろ！「チームTHEうぃず」

ドラえもんとゆかいな仲間たち

住所変更のある方、当機関誌のご不要な方はFAXにて（075）451－5700迄ご連絡下さい。

社会福祉法人　西陣会

- 法人本部
- 京都市民福祉センター
- 地域活動支援センター ふらっと
- 地域生活支援事業 レスパイトサービス
  TEL（〇七五）四五一―八九七一
  FAX（〇七五）四五一―五七〇〇
- 西陣児童館
- 京都市障害のある中高生のタイムケア事業 ういず
  TEL（〇七五）四五一―八九七二
  FAX（〇七五）四五一―五七〇〇
- 西陣会居宅サービス係 相談支援事業所 きずな
  TEL（〇七五）四一七―三四一〇
  FAX（〇七五）四四一―五二九一
- デイセンターふらっと
  TEL（〇七五）四一七―三四一一
  FAX（〇七五）四四一―五二九一
- 西陣会ホーム となり
- ショートステイ ゆう
  TEL（〇七五）四六八―三〇六八
  FAX（〇七五）四四一―五二九一
- 西陣会ホーム きたまち
  TEL（〇七五）四六二―三三五五
  FAX（〇七五）四六二―三三五六
- 京都市中部障害者地域生活支援センター にしじん
  TEL（〇七五）四一七―一六三〇
  FAX（〇七五）四五一―三六一九
- 京都市北部障害者地域生活支援センター きらリンク
  TEL（〇七五）七五二―〇一〇六
  FAX（〇七五）七五二―〇一〇七